

特集の意図

画像診断が目覚ましい進歩を遂げる一方で、精確な画像診断のためには患者からの「主訴」に立ち返ることが求められる。本特集では神経放射線のエキスパートたちにより、「主訴」に沿ってどのように検査を組み立てるのか、どのように画像と臨床現場とを結びつけるのかなど、臨床に役立つ画像診断技術を豊富な画像とともに語っていただく。

特集の構成

- 1. 主訴に沿う ― 俯瞰し収束する画像診断の日（徳丸阿耶）** 各論にも言及しつつ、本特集全体に通底する著者の考え方のエッセンスを凝縮する。症例画像を見ながら主訴と画像とのダイナミックな結び付きを概観することで、本特集全体をより深く理解してほしい。
- 2. ふるえる（原田太以佑，工藤興亮）** ふるえ（振戦）をきたす疾患は多岐にわたる。MRIをはじめ神経メラニンや鉄沈着、核医学検査などによる評価をとおして診断に至るプロセスを論じた。治療に直結する画像技術までを網羅する。
- 3. 頭が痛い（櫻井圭太，他）** 頭痛を呈する疾患として特に脳動脈乖離に焦点を絞り、血管壁イメージングを中心に解説する。診断のためには動脈内腔だけでなく動脈壁の評価が必要とされるが、そのために欠かせない空間分解能の高い撮像法についてもまとめる。
- 4. 二重に見える（森 壱）** 複視や眼球運動障害など、「物が二重に見える」という主訴にどのように向き合うべきか。診断における心構えから診断への具体的なアプローチまで、その根底にある思考を詳細に解き明かす。
- 5. 人が見える（宮田真里，掛田伸吾）** 誤って「人が見える」病態について、複雑幻視を中心に視覚認知における視覚情報処理のメカニズムを解説する。そのうえで、病態仮説としてデフォルトモードネットワークの障害など、近年のトピックについて触れる。
- 6. お腹が痛い（松木 充）** 「お腹が痛い」と訴える患者において、どのような疾患を考えるだろうか。急性間欠性ポルフィリン症をはじめとする代表疾患に加え、精神疾患患者などが腹痛を訴えたときに注意すべき疾患など、多彩な病態について解説する。